

2020年最初の注目材料は、前回は弱めに出たISM製造業景況感指数

2019年12月30日(月)

年末年始、日本は基本にお休みですが、海外では1月1日(元旦は世界的に祝日です)を除くと、基本的に通常営業となります。

年始の休みが入る関係もあり、米雇用統計は第2週目の発表となりますが、3日夜にISM製造業景況感指数(12月)が発表されます。

12月3日に発表された前回11月分は、48.3となった10月分から49.2に改善するとの予想に反して、前回よりも弱い48.1に留まりました。

また、4カ月連続で好悪判断の境目となる50を下回っており、米中通商摩擦問題などを受けて、米企業の景況感悪化が広がっている状況を意識させました。

米経済は、第1四半期GDPが前期比年率+3.1%とかなり好調となったものの、第2四半期は+2.0%、第3四半期は+2.1%という伸びにとどまり、数字的には決して悪いとは言えないものの、トランプ米大統領の目標である3%成長という水準にはやや物足りないという状況が続いています。

雇用市場が堅調な状況が続けるなか、個人消費は第2四半期が前期比年率+4.6%、第3四半期が+3.2%と好調を維持していますが、第2四半期、第3四半期とともにマイナスとなった設備投資が重石となっており、企業の景況感悪化が懸念される状況となっています。

こうした中で、設備投資とも関係の深い企業の景況感を示す前回のISM製造業景況感指数が弱めに出たことで、市場の警戒感を誘う場面が見られました。

前回の内訳を見てみると、新規受注が10月分から1.9ポイントも下げて47.2にとどまり、全体の数字と同様に4カ月連続での50割れ。雇用の数字も1.1ポイント下げての46.6と、こちらも4カ月連続での50割れという状況でした。

さらに、米中通商摩擦問題の長期化もあり、輸出が2.5ポイントも下げて47.9にとどまっております。こちらも警戒感につながりました。

また、その2日後12月5日に発表された11月分のISM非製造業景況感指数も予想の54.5、10月分の54.7を下回る53.9となりました。

業況指数が2010年以來の低水準である51.6まで低下しており、全体を押し下げた格好です。

製造業と違い、新規受注や雇用は強めに出ています。製造業が弱かったところに非製造業も冴えなかったことで、米企業全体に対する警戒感につながりました。

こうした状況を受けて、今回のISM製造業ですが、49.0と50には届かないものの、前回からの改善が見込まれています。

雇用や新規受注の数字も同様に回復を見せると、米企業業績に対する警戒感が後退し、ドル買いを誘いそうです。

なお、ISMに先駆けて31日夜(日本時間ではちょうど2020年になる1月1日午前0時)に、米調査会社コンファレンスボードの消費者信頼指数(12月)が発表されます。

前回まで4カ月連続で悪化している同指標ですが、今回は11月分の125.5よりも強い128.0が見込まれています。

今回は全体の数字自体は弱かったとはいえ、将来の見通しを示す期待指数が10月分の94.5から97.9に大きく改善しました。

今回の発表で、全体の数字が予想前後の好結果となり、期待指数も強めに出ると、ISMと合わせて米雇用統計(12月分は今週ではなく10日の発表)に対する期待感につながり、ドル買いを誘いそうです。

ここに掲載されている情報は、情報提供を目的としたものであり、特定の商品などの投資の勧誘を目的としたものではありません。

最終的な投資判断は、お客様ご自身の判断と責任によってなされ、この情報に基づいて被ったいかなる損害についても「株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド」では責任を一切負いかねます。「株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド」は、信頼できる情報をもとに情報を作成しておりますが、正確性や完全性について責任を負いません。ここに掲載されている情報は、作成時点のものであり、市場環境等の変化などによって予告なく変更または廃止されることがあります。ここに掲載されている情報の著作権は、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドに帰属し、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドの許可無しに転用、複製、複写はできません。株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド